
フライ・フィッシャーズ

カカオ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

フライ・フィッシュャーズ

【Nコード】

N4691Z

【作者名】

カカオ

【あらすじ】

その民宿は海辺にあった。概観はお世辞にもきれいとは言えず、くたびれたそれだった。そこにはどういうわけかワケあり客が集まり、従業員もワケありで悩みを抱えていた。それぞれの悩みが渦を生み、風を起こし、やがては台風となる。そんな嵐の中を、彼らは空を泳ぐこいのぼりの如く飛ぶことができるのか。

民宿熊島を舞台にした群像劇が、今まさに幕を開ける。

201号室の掃除

右手に掃除機、左手に掃除機のホースを持ち、熊島新は二階へと続く階段を上っている。額から汗の粒が蕁麻疹みたいに大量発生し、拭っても拭っても生産され続ける。

「あちー」

新は独り言を呟いた。

今日は六月二十五日、土曜日。天気、晴れ。湿度、スーパー高え。とにかく蒸し暑いのだ。先週末までは梅雨らしく連日雨を投下していたお天道様も、やがてそれに飽きて今度は太陽光線による熱照射攻撃に切り替えた。

連日の雨による湿気と昨今の温暖化も手伝って、日本古来より代々受け継がれている蒸し暑さが、よりバージョンプして今年も引き継がれてしまった。人間どもが暑さで苦しむ姿を、お天道様はさぞ愉快そうに眺めていることだろう。

二階廊下に到達。

左側に窓が真つさらなテストの答案みたいに何も無い空を映し、右側には201、202、203号室のドアが三つ並ぶ。

新は一番近くの201号室のドアをノックする。

返事はない。ただのドアのようだ。

いやいや、奥には201号室のお客さんがいるはず。新は腕時計を見る。去年、砂浜の掃除の最中に拾ったその見るからに安物のデジタル式の腕時計は十時三分を示している。

この時間、彼女は朝ごはんを食べ終えてうだうだしている時間だ。たぶん、いる。

たきがわ
「滝川さん」

お客さんの名を呼ぶ。返事はない。

そこで新は思い出す。201号室のお客さんがいつも口うるさく言っていたことを。

「はあ……」

新は嘆息し、そのカタカナ五文字の名を呼ぶ。

「……クリステルさん」

新がそう呼ぶやいなや、ドアは待ってましたといわんばかりに開けられた。明らかにドアの前でスタンバっていたものと思われる。

「よー、青少年」

201号室のお客さん——たきがわはなこ滝川花子は挨拶した。

実年齢は二十四歳とのことだが、実際の見た目は二十歳、いやそれより下にも見える。小動物めいた可愛らしさ、ぽわぽわふわふわした雰囲気振りまいているが、はつきりとした物言いと遠慮と容赦と礼儀のない振る舞いで、見た目から窺えるキャラを崩壊させている。

「あの滝川さん、部屋の掃除を——」

「あたしのことはクリステルと呼びな」

滝川は間髪いれず訂正した。譲れないらしい。

「は、はあ……すいません。それであの……クリステルさん、部屋の掃除の時間なので、少しの間外に出ていて欲しいんですけど」

「あーはいはい」

滝川は面倒臭そうに返事をする、財布と携帯電話をジーンズのポケットに突っ込み腕時計を装備、さらに皮製の大きな手帳を無理やり尻ポケットにねじ込む。部屋の外に出る。

彼女は新とすれ違うとき「アンタも高校生なんだからもつと遊びなよー」と声をかけ、階段を降りていった。

——これはこれで楽しい仕事なんだけどなあ。

新はそう思いつつ、掃除機くのいちたのコンセントを差込み、201号室を見渡す。隣の部屋の久野一太から借りたらしきマンガ本が何冊かベツドの上に放られている。机の上には朝ごはんの食器類が盆に載せられている。本当は食器類の片付けはセルフサービスで、各自がダイニングの流しまで持って行かなくてはならないのだが、滝川はよく忘れて部屋に放置してしまう。

新は掃除機のスイッチを入れようとして、すぐに取りやめる。部屋に転がっているスーパーボールを片付けてからでないと、掃除機が吸い込んで壊れてしまうかもしれない。滝川の部屋にはなぜかスーパーボールがいくつもあるところと転がっている。赤、黄、緑、青、キラキラしたようなものまでカラフルに揃っている。その一個一個を拾って小さなかごにまとめて机の上において置く。たぶんまたすぐには散らかるだろうけど。

——さて、と。

新は掃除機を起動させる。

この時間帯は『民宿熊島』の掃除の時間なのである。

私は異常なし異常なし。異常あり。

*

やっちまった。滝川はまずそう思った。

あたかも誰かを殺してきたようなニュアンスが窺えるが、幸い滝川は殺人犯ではない。

彼女は砂浜に寝そべり、横を向いて愛車『赤い彗星号』（ふつーの自転車）を見やる。滝川と同じく寝そべるようにぶっ倒れている。さび付いて赤い部分がほとんど侵食され、酷い有様だった。まあ、さび付いたのはもつと前からだけど。『赤い彗星号』というのは、前に付き合っていた元カレがつけた名前だ。何かのアニメにちなんだ名らしく、三倍のスピードで走れるとかどうか。滝川はその元ネタはわからないし気にしてもいなかったが。

ゴールデンウィークが明けて二日目、休みでもなければ夏でもない、ましてや時刻は夕方四時半、砂浜に人はあまりいなかった。犬の散歩をしているおばさんが横になっている滝川のほうを奇異の目で見てくる。

黒のパンツスーツにヒールという出で立ちで砂浜に大の字になっているのだ。しかも頭から爪先まで既に砂まみれで、奇怪に思われなくても仕方がない。

「あーん」

突然発せられた滝川の咆哮に、おばさんはぎょっとして犬を引きずって逃げるように立ち去った。

「あっはっはーザマーみやがれっ。あっはっは……はっ……はー」

滝川の笑いは溜息に変わっていく。「はー、どうするかなあ」

最初は乗り物酔いかと思った。

通勤電車の中で、滝川が体の不調を感じるようになったのは、大学を卒業し会社員生活が始まって一週間ほど経ったときだった。

疲れてるからなー、あたし。

働き者だからなー、あたし。

頑張ってるもんなー、あたし。

色々と言いつて試してみた。誤魔化してもみた。けれど自分に嘘をつけばつくほど、体の不調は酷くなっていった。

苦しい。心臓が、苦しい。

乗り物酔いなんかでないのは間違いなかった。もし乗り物酔いなら気持ち悪くなるはずで、心臓を鷲掴みにされて握り潰されているような苦しみや痛みを感じるなどない。

けれど病院で診てもらっても、異常なしと言われた。

滝川はこの『異常なし』を信じることにした。

異常なし。

異常なし。

わたしは、異常なし。

もちろん、異常あり、だった。

滝川が住むアパートから会社までは電車を乗り継いで一時間かかる。最初の頃は苦しくても我慢して会社まで辿り着けた。

しかし徐々に苦しさは増していき、乗り換えの駅で休憩するようになった。会社までかかる時間は一時間十分になった。

乗り換えの駅まで我慢できなくて、途中の駅で降りるようになった。会社までかかる時間は一時間二十分になった。

降りて休憩する感覚が徐々に短くなった。ついには二駅に一度降りて息を整えなければ体がもたなくなった。会社までかかる時間は二時間となった。

そんなことを、滝川は一年以上続けた。

でも、とうとう限界がやって来た。

ゴールデンウィークが明けて二日後、滝川は電車に乗ることもで

きなくなつた。

苦しいとわかつててなんで乗るの？

コレに乗ってどこに運ばれちゃうの？

なんでわたしは運ばれちゃうの？

自分という存在が、長距離トラックに運ばれる荷物の一つにでもなつたかのように思えた。一人の命じゃなくて、一つの物。運ばれていく、一つの物。荷物。

滝川は逃げた。

電車に乗らずに駅を出て、駐輪場に停めてあつた赤い彗星号にまたがってペダルを必死にこいだ。とにかく駅から遠ざかりたかつた。半ばヤケクソ気味に。

なにかを求めるように。

近所の国道を道なりに突っ走り、大きな橋を渡り、また道なりに自転車走らせ、途中から有料道路になつて車しか通れなくなつたので回り道したら、荒涼とした工業団地に突入してびっくりした。ドンドンカンカン音を立てる無機質な工場と煙をもくもく噴き上げる煙突、ひび割れた墓石のような団地。

ここは世界の果て？

そんなことを思った。

そして滝川はその団地を抜け、さらに自転車をこいで海までやってきた。九時間以上かかつた。

脚はもう使い物にならないほど疲れていて、いつそ切断して海に放り込んでやりたい気持ちにかられたが、そうしたら足の爪にマニキュアを塗る楽しみがなくなると思つてやめておいた。

海まで自転車で来られたのは、前付き合っていた彼氏がよく運転していた道を覚えていたからだ。

ふと携帯の存在を思い出して、すぐ近くに転がっているバッグに腕を伸ばす。腕時計が日光を反射して眩しい。いかにも高級な腕時計らしい輝きに思えて、滝川は溜息をつく。——どうしてこんなもん買っちゃったんだよあたし。

携帯を確認すると、恐ろしい数の着信とメールを受信していた。会社の上司の福岡靖男ふくおかやすおやその他同僚の皆々様、母にまで連絡がいつているらしく『オカン』という名前まで着信履歴に名前を並べていた。さらに元カレの名前まであったのには本当に驚いた。

「なんてこったい」

面倒なので、携帯の電源は切った。ついでに自分の電源も切るべく瞳を閉じた。

ヘイ、ネーチャン

何者かの気配を感じて、滝川は目を開けた。

——うわー、砂と潮風で髪の毛がガビガビだ……ん？

上から某子供店長ばりにかわゆい少年が滝川を見下ろしていた。小学校低学年だろうか。切りそろえられた前髪がかわゆすぎる。

「ヘイ、ネーチャン。添い寝してあげよーかい？」

少年は言った。某子供店長とは雲泥の差である。

「少年、ナンパの仕方になってないぜ」

「えっ——」

絶句する少年。相当自信があつたらしい。

十七秒ほど思案し、少年は何かを思いついたらしい。自信ありげにこう言った。

「ヘイ、ネーチャン。おっぱい揉ませろや」

ぶっ叩いてやったのは言うまでもない。大人としてしっかりと教育しとかねば。

やれやれ、と嘆息し、滝川は再びごろりと砂の上に横になった。

「ネーチャン、名前なんつうの？」

まだいたのか。

無視した。

「おれは久野一太っていうんだ」

訊いてない。

「あだ名はクノイチ」

だから誰もそんなこと訊いてない。

「小学五年、独身」

独身で。あたりめーだ。

「礼儀知らずだよネーチャン。名乗られたら自分も名乗らないといけないんだよ」

まっとうなことを言っているようだが人の胸を揉ませるだとかい

うヤツに礼儀知らずなどと言われたかない。

「ヘイ、ネーチャン」

いつの間にか少年は滝川の頭部の横に腰を下ろしていた。ハーフパンツから覗く脚は女の子かと思うほどに白くてすべすべしてそうだった。「ヘイ、ネーチャン。名前なんていうの？」

だーもーしつけーなー、と思いつつ、滝川は少し嬉しかった。話しかけてくれる人がいることに。一人でいると、本当に世界の果てに来てしまったようで恐かったからだ。

「あたしは滝川——」

苗字まで言つて、ふとあの女の顔が頭に浮かんだ。きれいで華やかで、向こう側の世界の住民のあの女の顔が。

「……すてる」

「お？」

「クリステル……滝川クリステルなのだ」

滝川は言つた。ちなみに本名は滝川花子。

「おお、外人？ ハーフ？」

「琉球人とアイヌ人のハーフだよ」

母の出身は沖縄。父の出身は北海道。

「よくわかんないけどスゲー。クリスタル姉ちゃん」

「クリスタル違うつつうの。あたしのことはクリステルと呼びな」

失敬なナンパ少年——クノイチと不本意で嘘っぱちな自己紹介を交わした後も、滝川はクノイチと話しをした。会話していくにつれて、クノイチが近くの民宿に泊まっていることがわかった。

見たところ周囲にネットカフェやビジネスホテルなんか無さそうだったので、これ幸いと滝川はクノイチにその民宿まで案内をさせた。

クノイチについて行った先は歩いて二十分ちよつとのところにある『民宿熊島』だった。

——とりあえず寝床確保、と。

滝川は小さく安堵の息を吐いた。

『民宿熊島』は海沿い、目の前が砂浜という津波が来たらまず一番最初に流されそうな場所にぽつんと建っている。

外観は遠くから見れば悪くはない。白を基調とした壁面に赤い屋根、正面入り口には広々としたウッドデッキがあり、客がくつろげるテーブル席も設けられている。

けれど接近して見ると、ボロい。

白い壁面は明らかに素人がペンキを塗ったであろうムラのある雑な仕事、赤い屋根は赤茶けて汚くなっている。ウッドデッキは所々が朽ちて耐久性に一抹の不安を感じさせる。

滝川はそんなこと気にもしなかったが。

屋根があつて床があつて、そして人がいる。

それだけで十分だったからだ。

信じられないことに、民宿にはクノイチがたった一人の客だった。滝川は最初ホームアローン状態のクノイチを不思議に思った。

クノイチは民宿の客ではあるが、あたかもこの住民のように生活していた。民宿で寝食をするのももちろん、学校もここから通っている。帰ってくる場所も民宿。

いったい家はどうしたんだろ？ というか宿賃は払えてんの？

滝川はある日、そんな疑問をクノイチにぶつけた。

「おれのお父さんとお母さん、仕事で忙しいから」

答えはそれだけだった。

あまり触れられたくないのだろう。滝川はそう判断し、それ以上何も訊かなかった。滝川にだって触れられたくないことの二つや二つある。それに民宿の人はクノイチを普通に扱っている。親公認なのだから問題はないのだろう。本人がどう思っているかはまた別だが。

民宿にはクノイチのほかに、ここの主の熊島紀伊介くましきいすけというおじい

さんと、その孫で高校生の熊島新がいた。この二人が民宿を切り盛りしているようだが、主に立ち働いているのは新だった。紀伊介はいつもぼんやりとウッドデッキのテーブル席に座り、海を眺めながら紫煙をくゆらせている。暢気な隠居生活だ。

会社からはやたらと電話がかかってきて、一度だけ出たら凄い怒鳴られた。上司の福岡だった。

滝川は「もう辞めるっちゃ」とふざけて言って電話を切った。それからしばらくは携帯の電源を切っていた。最近は電源をつけてはいるが、全ての着信とメールを無視している。

とりたてて目的があるわけでもない。お金は使う暇すらなかったからたくさんある。ひとまずの長い休暇だと思って、滝川はのんびりすることにした。

そして、周囲には自分をクリステルと呼べと強要した。

それでは、次のニュースをお伝えします

『民宿熊島』に宿泊して六日目、最初の日曜日、その日の夜。

滝川は泊まっている部屋——201号室でぼんやりとテレビを見ていた。画面はニュース番組を映していて、政治家の問題発言を問題にして肝心な問題は置いてきぼりにしていることを問題にしていた。この国は問題だらけである。

まあ、滝川はニュースを見ているのではなくて、彼女を見ているだけだったのだが。

『それでは、次のニュースをお伝えします』

滝川クリステルが、画面の向こうで言った。

DNA配列に日本とフランスの螺旋が混合しさらに美に特化させた結果のような顔つきに、きれいなのに力強い瞳。華やか過ぎて周囲の色がくすんで見えてしまう。周囲というか、主に自分が。

「同じ滝川なのに」

——どうしてこうも違うんだろ。

テレビをぶん殴ってやろうかと思ったけど、目の前の14型ブラウン管テレビには責任はないことを思い出し、枕にバツと拳をめり込ませたり、クノイチと駄菓子屋へ行ったときにハズレくじでもらったスーパールールを思い切り壁に投げて我慢した。スーパールールはぽこぽこと壁に跳ね返って最終的にはテレビに直撃したが。

——もしあたしにフランスの血が混じっていたら、あたしもクリステルみたいになれたのかなあ。

滝川クリステル。

あたしは、滝川花子。うーん、納得いかねー。

「クリスタル姉ー、あーそーぼっ」

ドアの向こうからクノイチの声がした。——夜の十時過ぎだといふのに、まったく最近の小学生は。誰がドアを開けてやるものか。厳しくしつけないといけないね、うん。

「ガキはもう寝る時間だろーが。それと、あたしのことはクリステルと呼びな」

「モンハンやろうぜい」

滝川はすぐにドアを開けた。PSPを二台持ってニヒツと笑っているクノイチがいた。滝川もニカツと笑った。

その日は朝までモンハン大会だった。

なんかねえ、記憶喪失らしいよ

滝川が『民宿熊島』に泊まり始めて二週間ほど経ったころ、一人の女の客がやってきた。

滝川は自分の部屋の窓から、その女が民宿に入ってくるところを見ていた。凜としたキャリアウーマン風の感じだったが、実際に話してみるとスローで上品なマダムといった佇まいだった。

とてもきれいな女で「妖艶」という単語を当てはめたくなくなるような雰囲気をもし出していた。見たところ三十過ぎぐらいか。なんだか滝川クリステルと似たようなオーラを感じないでもない。

上品、気品、品格。

それら上等な質感めいたものを体の表面にぺたぺた貼り付けて歩いているように見える。

あーそうそう。コレも忘れちゃいけない。

巨乳。

胸元が目立たない服装で誤魔化しているようだけど、誤魔化しきれていない。まごうことなき巨乳ちゃんである。驚掴みにしようにも手からこぼれるに違いない。

彼女は滝川の部屋の隣の隣、203号室に泊まり、三日経っても四日経っても泊まり続けている。

—— いったいいつまで泊まるつもりなんだ？ いい大人が平日なのに休んで民宿に泊まるなんて何かワケありかも。警察から逃げるとか？

自分のことは棚にあげて好き勝手考える滝川だった。

そして彼女は五月の末日の夜、クノイチを偵察にやった。クノイチは十分ほどで戻ってきた。

「どうだった？」

「スゲーおっぱいだった」

「んなこと訊いてないよ」

「クリスタル姉ちゃんよりずっとおつきいおっぱいだった」

ぶっ叩いたのは言うまでもない。

「あだただ……なんかねえ、記憶喪失らしいよ」

「あ？」

「だからね、記憶喪失。自分の名前以外はぜんぶ覚えてないんだって」

うそ臭いことこの上ないが、どうも本当らしい。名前だけは覚えていて春日井^{かすがいやよい}弥生という。

——ま、いいや。韓流ドラマじゃよくあるみたいだしな。うん。

滝川はすぐに春日井のことなどどうでもよくなった。とりあえず無害みたいだし、自分の休みを邪魔するふうでもない。春日井は一日のほとんどを民宿一階のリビングにあるソファに座って、お上品に読書をしているだけなのだ。

そう、春日井のことなんて気にするときではないのだ。

目下のところ『この休みがいつまで続くのか、いつまで続けるのか』というのが問題なのだった。滝川はその問題を先送りし続け、本日六月二十五日、土曜日の朝を迎えたのだった。

とりあえず今日も生きてるみたいねー

——おはよー、あたし。

滝川はむくりと起き上がり、徘徊老人のようによたよた歩いて部屋のドアを開ける。ドアを開けてすぐのところに、盆に載った朝食が置いてあった。

これはこの民宿のよく言えば特徴、悪く言えば雑な仕事である。二食付きではあるが、食事はこのように廊下の床に置かれる。客の扱いがまるで引き籠もりである。

滝川は食事を平らげ盆はそのまま机の上に置いておく。本当は一階のダイニングにある流しまで運ばなくてはならないのだが、どうせ新が掃除しに来たときにでも適当に片付けてくれるのだ。

顔を洗い寝癖を直し、ジーンズとＴシャツに着替えて準備完了。

——化粧？ しねーよ。

会社員時代には考えられない身軽な装備である。

と、ドアがノックされ「滝川さん」と新が呼ぶ。もちろん無視した。呼び方がなっちゃいない。滝川はドアの前にスタンバって新が正しく自分を呼称するのを待つ。

「……クリステルさん」

若干の躊躇が感じられたがまあ合格にしてやろうと、滝川はドアを開ける。

「よー、青少年」

せっかく合格にしてやったのに、新はあまり元気じゃなさそうだった。——若いのにいかなー。

掃除だなんだと新がうるさく言うので、滝川は仕方なく財布と携帯をジーンズのポケットに突っ込み腕時計をはめる。——おつといけねー、手帳も持っていかなば。

手帳はちよつとサイズが大きくかさばったが、無理やり尻ポケットにねじこむ。ついでに新を自分なりに励ましてから一階に降りる。

一階には春日井弥生がソファに座って文庫本を読んでいた。本を読む眼差しは非常に鋭く、いつもの上品な雰囲気とは違った。

——そんなに面白い本読んでんの？

滝川の視線に気付いたのか、春日井はビクツとし、なんとも奇妙な笑みを浮かべ会釈した。滝川も僅かに首を曲げただけの会釈を返しておいた。それからプラプラと玄関から外に出た。

ウッドデッキのテーブル席で、主の紀伊介がぼんやりと煙草を吸っている。

「おはー、ジジイ。とりあえず今日も生きてるみたいねー」

滝川がけしからん挨拶をすると、紀伊介が何やらおいでおいでと手招きしてくる。白髪のロン毛をポニーテールにしてごついサングラスをかけた佇まいも手伝って、その挙動は不審極まりない。

でも滝川はまったく意に返さず平然と近づき、向かい側の席に腰を下ろした。

紀伊介は煙草を勧める。滝川は遠慮なく一本もらって吸った。二本吸った。結局三本灰にした。

「ここは気に入ったか？」

紀伊介が訊いてきた。

「うん、まあね。ただ隣のガキがあたしに対して敬意がなさ過ぎるのが不満といえば不満だね」

隣のガキとは久野一太——クノイチのことだ。

「あのガキに敬意を求めるんぞ愚の骨頂。むしろ目線を合わせて遊ぶほうがいいぞい。まあ、あんたはそんなこと意識せんでも目線は同じだな」

「なんだとう」

「反応があのガキと全く同じじゃ」

「……」

「まあ、あのガキはガキで色々と思ってることがある。あんたみたいな姉代わりがいると助かる。新は学校や受験勉強があるからのう」
「あたしだって——」

「あんたはなんもなかるうが」

「ジジイ、なかなかキツイことズバズバ言うねー……」

ふと民宿の中から視線を感じ、滝川は振り向く。けれど誰も自分を見ていなかった。窓からリビングの様子が窺えるが、ソファに座って読書中の春日井弥生の後頭部が見えるだけだった。

—— おつかしいなあ、たしかに見られてる気がしたのに。

「あ、そうだジジイ。この辺にリサイクルショップってない？」

「リサイクルショップ？ 古道具屋ならあるぞい」

「そこって買い取りやってんの？」

「やっとなるやっとなる」

「オーケーオーケー」

「む、もしや金がねえとか言っくんじゃなかるうな。宿賃は払ってくれねえと困るぞ」

「ちげーよクソジジイ。生きたまま火葬場に放り込むぞ。そうじゃなくて、不用品があんだけと捨てるのは勿体無いから売っちゃおうかなーって思ってたさ」

「だったらワシによこせ」

「だったら金よこせ。そしたらくれてやんよ」

酷い会話だがご了承していただけると幸いである。なにせこの二人の会話は、今ではすっかりこれがデフォルトになってしまったのだ。

大人って何なの？

——古道具屋の名前はコンドウ、コンドウ。近いの「近」に任天堂の「堂」で近堂……。

滝川は頭の中でそんなふうに暗証しながら、紀伊介に教えてもらった古道具屋に向かうべく、海沿いを延々と走る国道の歩道を歩いている。赤い彗星号に乗らないのはダイエットのため、というのはここだけの秘密だ。だが早くも疲れ始め自転車を使用しなかったことを後悔する。

腕時計をちらりと見やる。時間を見たんじゃない、腕時計そのものを睨んだ。——もう知らない、こんなもん。

天気は快晴、けれどとにかく蒸し暑い。歩き始めてまだ十分ぐらいしか経っていないのに、早くもＴシャツが汗で肌に張り付いている。——いやーん透けてブラが見えちゃうわー。

誰も見ていなかった。

ほろ苦い寂しさを感じつつ歩を進めっていると、前方二十五メートルほど先に三人の少年少女たちの姿を視認。少女は二人でどちらも中学生ぐらい。私服なのは、今日が土曜日で休みだからなのだろう。

もう一人は、今や滝川にとって親友にして相棒にして弟分になりつつある久野一太ことクノイチだった。

「ヘイヘイ、オネーちゃんたち、おれが泊まってるホテルに遊びに来ないかい？　ゴージャスで有名人御用達、キングサイズのベッドもあるぜい」

——嘘八百じゃねーか。そもそもホテルじゃなくて民宿だし。

クノイチの果敢で嘘まみれのナンパは大方の予想を裏切ることなく失敗、女子中学生二人に「阿呆」とバカにされ笑われてしまった。女子二人は何事も無かったかのように楽しそうにおしゃべりをしながら去っていく。

——　　「まったくクノイチは。どうしてあんな阿呆なナンパしかできないかなあ。」

滝川は溜息をつき、肩を落としているクノイチに近づき、声をかけた。

「おはー、クノイチ」

「おははははは……」

クノイチは壊れかけだった。心神喪失中らしい。

「どうしたんクノイチ、ナンパしくったぐらいで気落とすなって。何度もナンパしていくうちにきつと成功するよ」

滝川はクノイチの頭をぽんぽんしながら言った。

「うん……　そうだな。うん、そうだそうだ」

「そうだそうだそうなのだ」

便乗する滝川。恐ろしく適当なテンションである。

「うん、俺もよくわかんないけどそう思うのだ」

とりあえずクノイチは元気を出してくれたようだ。「けどさー、大人はスゲーよなー。ナンパなんか簡単に成功させちゃうんだもん」

「んー、それは違うぞクノイチ。大人だからってナンパが上手いとは限らないよ」

「えっ——」

「大人の中にだってナンパの上手いヤツもいれば下手なヤツだっているよ。ナンパすらしたこともないヤツだっているよん」

「……　じゃあ、大人って何？」

「クノイチ？」

クノイチの様子がおかしいことに、滝川は気付いた。クノイチは拳を握り締め、肩を小さく震わせている。泣きそうなのか、悔しいからなのか、それとも両方なのか。判然としない。

「大人って何なの？　ねえクリスタル姉、教えてよっ！」

いつもなら「クリステルだ」と訂正を入れるところだけど、滝川はクノイチの剣幕に二の句がつけない。まるで食い殺す勢いで、滝川に迫っているからだ。

滝川は頭をフル回転させて必死に考える。

大人大人大人……これまで関わったたくさんの大人の顔が思い浮かぶ。でも、答えは一向に出てこない。自分のことを考えてみる。余計わからなくなった。

——大人って……何だろ。あたしが訊きたいよ。福岡あたりにさ。

気迫というか希薄な存在になりたいです

入社して間もない頃、滝川は新入社員歓迎会に出席した。

出席といっても会社内にバーを完備しているので、歓迎会もそこで行われた。シェフが呼ばれ、豪華な料理と酒が次々と運ばれてくる。

滝川は新入社員の洗礼を受けていたので、料理を味合うどころではなかったが。

上司の酒を注ぎ、料理を運び、つまらない冗談を一億倍ぐらいおもしろく脳みそに暗示をかけて笑う。同期の子たちも同じようにくるくる動いていた。

——現実味ないねえ……。

それが滝川の感想だった。

会社に洒落たバーがあつてフランスだかイタリアだか知らないけどシェフを呼んじゃったりして、この不景気な世の中においてこんなに浮かれている会社は珍しい。全社員五十人と、規模は小さいが勢いに乗っていた。

そんな環境のせいもあつてか先輩や上司たちは『高い物はいいいのだ』と連呼し、『借金はどうでしょう』と吠え、阿呆みたいに高いブランド物のスーツに身を包んでいた。

滝川が今身に着けている腕時計、それに尻ポケットに突っ込まれ無残な形に変形しつつある皮製の手帳は当時買ったものだ。時計はロレックスを中古で二十万、手帳は五万かった。それでも会社の人たちが使っているものに比べたら安かったらしいけど。今考えるとなんて馬鹿馬鹿しい買い物をしたんだと思う。身の丈に合っていないというか、キャラにあっていないアイテムだなと滝川は思っている。

会社内での新入社員歓迎会が終わると、自然な流れで二次会へと移行、するはずだった。滝川もそうだと思っていた。

けれど、そう思っていなかった人がいた。滝川の同期たちだった。「あ、すいません。時間も遅いんでお先失礼しまーす」「僕も」「私も」

どんどん帰っていく同期たち、そしてついには滝川一人が残された。

——空気読めよお……。あたしだって帰りたいのに……。

滝川は啞然としつつ、その場に残って二次会に新入社員単独で出席した。

洗礼は滝川一人に集中した。とくに当たりがきつかったのが直属の上司、福岡靖男だった。居酒屋へ移動する間も二次会が始まっただけから、滝川は福岡になじられた。

「二次会が誰のためにあんのかわかってんのかよ？」

ごもつともです。そして頭部をぴしゃりと叩かれた。痛いです。

「おめーらのためだろ？ ああ？」

仰るとおりです。そして頭部をぴしゃりと叩かれた。痛いです。

恐いです。

福岡は三十過ぎの妻子持ちらしい（こんな男がお父さんじゃなくてよかった）。ゴルフ焼けした黒い肌に体つきはゴーレムの如くがつちりしていて、滝川としてはできる限り接触したくない人柄の筆頭だった。

が、彼女は完全にロックオンされてしまった。

それからというもの、滝川は事あるごとに福岡に叱られ怒鳴られ罵られた。その間、なぜか同期の人間は一人二人と会社から去っていった。

——なんだよー。お前らいったい何が不満なんだよー。あたしが全部不満受け止めてる感じじゃんかよー……。

ある日、福岡はこんなことを言っていた。

「なあ滝川、こんなこと言いたかないけどよー」

じゃあ言わなけりゃいい。

「お前、覇気がねーよ。覇気が。辞めてった奴等もそうだ。競争し

て年収ガンガン上げてくには周りのヤツを潰すぐらいの気迫が欲しいわけよ。切磋琢磨ってやつ？」

——覇気がなくてすみません。吐き気ならあります。気迫というか希薄な存在になりたいです。

もちろん思っても言わなかった。

……わかんないっちゃ

「クリスタル姉、大人ってどうすりやなれるの！」

クノイチの声で、滝川は我に返った。

——いけねーいけねー。黒歴史を思い出しちまったわ。でも、結局大人ってなんだろう。福岡理論でいくと『覇気があつて競争に打ち勝ってガンガン年収上げていく』という条件を満たせば大人、ということになりそうだ。

……納得いかねー。認めたくねー。

「……わかんないっちゃ」

滝川は小さく呟いたが、クノイチは聞き逃さなかった。

「えっ！？　だってクリスタル姉、大人なんだろう！？」

——痛いところくねークノイチ。

「たぶん」

「えーなんだよそれー、意味わかんねー」

「あたしだって意味わかんねーよ」

「なんだそりゃ」

「まあ、わかつたら教えてやるぜい」

クノイチは「むむむ」と円周率を覚えるのに苦戦する小学生みたいな顔をしている。あれ、今は円周率って3なんだっけか。わからん。ジエネレーションギャップをひしひしと感じる今日この頃。

「……約束だぞ」

クノイチは滝川をじっと見て言った。——そんなにじっと見ないでくれ。予防線張りづらいぜ。「女に二言はない」

かつこええ言葉で締めてみる滝川だった。

「はあ……」

「いっちょまえに溜息なんかついて、一億年早いぞ少年」

「クリスタル姉のせいだ」

「あたしのことはクリステルと呼びな」

「クリステル姉のせいだ」

「もう、しゃあないな」

滝川は時計をあげるか手帳をあげるかで一瞬迷ったが、時計のほうが高く売れそうな気がしたので、手帳をあげることにした。

「クノイチ、お前にこれを授けよう」

「お？ ……こ、これは！？」

「ふふふ、驚いたか」

「これ、何？」

「……」

手帳は大人のアイテムだと説明すると、クノイチは飛ぶようにして喜んだ。

その後、駄菓子屋でクノイチにアイスを奢ったりくじ引きで本気の一喜一憂をして、滝川は宿に戻った。古道具屋に行き忘れたことに気付いたのは、自分の部屋で鏡を見ているときだった。

馬子にも衣装って感じだなあ

その日の夜。

滝川は自分の部屋の鏡で、己の顔を凝視していた。童顔でふわふわぽわぽわした感じの女子がそこには映っていた。本当に大人なのかと首をひねってしまう。

——どうしてあなたはクリステルじゃないんだ？　なんで花子なんだ？

クリステルならきつとこの時計も似合うし、あの手帳だってしつくりくるだろう。あの手帳のページを繰ってスケジュールを確認するクリステルというだけで、絵になるし様になる。でもあたしはどうだ？　福岡にバカにされて叩かれるのが落ちだ。

——それか……元カレに笑われるか。

「成川^{なりかわ}くん、元気かなあ」

「ぎゃははははっ、なんだよお前それ！　馬子にも衣装って感じだなあ」

「あははは」

会社員生活がスタートしてから最初のデートの日、滝川は成川修^{なりかわおさむ}に爆笑された。成川は大学のゼミで一緒にになり、二年生からずっと付き合っていた彼氏、だった（過去形を強調）。

仕事帰りに飲みに行くということになり、スーツのままで馳せ参じた結果がこのザマだった。滝川としては自信があった。ビシツとしたあたしを見ておくれ、といわんばかりに。ちなみに成川は普通にスーツ and ネクタイ姿だった。悔しいけど似合っていた。

「なんつーかさー、お前はいつものスポーティーな感じがいいと思うよ」

「あははは」

普段の滝川はジーンズorジャージ、トップスは夏はTシャツ、冬になるとその上にジャージの上着を着ていた。スポーティーというか、普通に部屋着だった。動きやすい格好が滝川は好きなのである。

「っーかなんだよそのヒール」「あははは」「高そうだなーその時計、巻く腕間違ってるくさいけど」「あははは」——しばらくゴラァ！ お前こそなんだ、趣味の悪いスポーツカー乗ってんだろぅがっ。休日になると海沿いの道をぐるぐると飽きもせず走って何が楽しいんだ。嫌なことがあると物凄いスピードでぐるぐると走って気分爽快って阿呆か！ しかも実は隠れオタで『花子には俺の秘密を見せる』なーんて重々しい口調で言うから何かと思えば美少女フィギュアの群れでそのくせ乗ってる車にアニメ的な外装を施すんだから隠れてんのか堂々としてんのかわかんねーよ！

……とは、思っても言わないでおいた。

どうしてそんな彼氏と付き合っていたのか、自分でもよくわからない。——学生時代は楽しかったんだけどね。

ただ、成川の車趣味のおかげで、滝川は自転車で砂浜に辿り着くことができたのだ。

民宿熊島の近くを通る国道はきれいな楕円形の形をしていて、サーキットのような趣をかし出している。実際、夏の夜なんかは走り屋たちがブオンブオン愛車を走らせる。成川もそんな走り屋さんたちの一人で、滝川はよく車の助手席に乗ってお供していた。

「いやあ笑った笑った。やっぱり花子って最高だよ」

「あははは」

おめーは最低だよ。

そのデートの帰り道、滝川は別れのメールを送った。

——おっと、いかん。またも黒歴史がフラッシュバック。

滝川は自分の顔を凝視したまま、意識をぶっ飛ばせていた。時

間になると十分ほどだったようだ。物凄く時間の無駄遣いをした気がして、気が滅入る。

「成川のアホー」

独り言を呟いてみる。――鏡の中のび、美……美人さんも怒っちゃってるぞー……はあ。

『美人さん』と発音することに躊躇した自分が情けなくなる滝川である。

「わたしはクリステル。滝川クリステル」

今度ははっきりと発音する。やはり鏡の中の美人さん（躊躇してない）は同じように口を動かす。

けれど。

鏡に映っているのはジャージ上下を着た女子だった。どう好意的に見ても滝川クリステルではない。そして不覚にも、似合ってる、と思ってしまう滝川だった。

ジジイ、今日の朝ごはんがカップ麺だったんだけど

——おはー、あたす。

地方在住の祖母風一人称を用いて朝のご挨拶を試みた。

六月二十六日、日曜日、午前八時。滝川はベッドの上からメモリ不足のPCのように起動した。ねみー。

ゾンビのようによる移動してドアを開ける。今日のごはんはナニかなーと、廊下の床を見て、滝川はぎょつとした。カップ麺が置いてあるだけだった。盆にも載っておらず、床に直置きである。

——ついにここまで手抜きするようになったのか……。

斬新過ぎる食事に驚愕と落胆と憤りを感じつつ、滝川は部屋の中で麺を啜る。窓から朝日が差し込み、波の音が聞こえてくる。朝ごはんはともかく、海の朝は良いね。うん。

カップ麺を食べ終えた滝川は、昨日と同じく財布携帯腕時計セツトを装備。昨日は結局クノイチを励ます会（たった今命名）があつて古道具屋に行くのをすっかり忘れてしまった。

——この時計、いくらで売れるかなあ。おつといけねー、ジジイに文句を言わねば。いくらなんでも今日の朝ごはんはあんまりだ。滝川が一階に降りると、紀伊介はダイニングのテーブル席に座っていた。たしか民宿の人はここでメシを食つてとかクノイチが言つてたな、と思い出す滝川。

紀伊介だけでなく、春日井も座っている。二人は何やら小声で話し合っているところだった。紀伊介はいつものようにサングラスをかけているのでわからないが、春日井の表情は引き締まっていて緊迫感に満ち溢れていた、が、滝川が現れるとまたいつものおっとり上品な表情に戻った。

「おはようございます、クリステルさん」

春日井はぺこりとお辞儀した。胸がぷるんと震える——って、なしてパジャマなの？

「おはよーございます」

とりあえず挨拶しておいた。——だからなぜにパジャマ……。滝川は春日井のパジャマを凝視した。薄いピンク色の花柄のパジャマだった。胸元のボタンは二つ解放され、魅惑の谷間が外界に晒されている。

「おいこら、ワシにも挨拶せいや」

「あ？」

——そうだった。ジジイに文句を言わねば。

「ジジイ、今日の朝ごはんがカップ麺だったんだけど」

滝川は言った。

「うむ。若者を意識して作ったのじゃ」

——ミクロも悪びれずに紀伊介は言った。

「ぬわにが若者を意識した、だよ。朝飯がカップ麺なんて有り得ね

」

「せっかくワシが腕によりをかけて作ったものに、なんちゅーことを言う娘じゃ」

「腕により？ 阿呆か。——って、あれ？ 新は？ いないの？」

そう、普段なら新が食事を作っている。というかこの民宿の仕事全般を新が担っている。

「あーっと……ちと、あれじゃ、風邪を引いてのう」

「はーん」

紀伊介の言い方は歯切れが悪いことこの上なかったが、滝川は全然気付いていなかった。

——風邪ならしょうがないか。カップ麺、好きだしね。うん。

あたしのマブに指一本触れるんじゃないぜ

——さつてとー、今日こそ腕時計売っぱらうぜー。ええと古道具屋の名前はなんだっけ……ゲンドウ？ ガンドウ？ コンドウ？ うーん『なんちゃらドウ』だったことは覚えてるんだけどなー。

蜃気楼よりおぼろげな記憶を頼りに、滝川は民宿を出て、愛車『赤い彗星号』に乗ろうとする、が、なかった。——ありや。

民宿の玄関を出てすぐ目の前に停めてある。いつもなら。

——クノイチが乗ってるのかもしれない。新は風邪で寝込んでいるらしいし、紀伊介も春日井も民宿の中に入る。でもクノイチの姿はまだ見てない。ていうかクノイチはいつも朝飯食ったらすぐに外に遊びに行くしなあ。でもサドルをマックス下げても厳しいんじゃないか？ ま、いいや。

滝川は歩いていくことにする。

浜辺から階段を上って国道へと出る。遠くの景色がゆらめいている。もはや景色は真夏のそれである。まだ六月だというのに。

——うげー、六月の景色じゃねー。八月になったら五十度とかいきそうだね。

出発早々減入った気分はその後二十分ほど続いた。紀伊介に教わった古道具屋まであと五分ほどで着く、というところで、見たことのある赤い自転車と見たことのある派手なスポーツカー、それに見たことのある民宿に泊まり続けるホームアローン少年と見たことのある元カレを視認した。

——どういこうラボだよ……。

クノイチと成川が、国道沿いの歩道で向かい合って何やら口論を展開していた。……いや、成川が一方的に怒鳴っているらしい。顔を猿の尻みたいに赤くして唾を飛ばしながら吠えている。

クノイチは歯を食いしばってそれに耐えている。赤い彗星号はクノイチが支えている。

クノイチと成川の後ろ斜め後方、海岸を目の前にした位置には県営の有料駐車場があり、イタ車が停めてあった。『イタリア製の車ではない』ということを言及しておく。痛車である。見た目はスポーツカーだが、真つ赤なボディにはアニメ絵美少女がボンネットや両サイドのドアにでかでかと描かれている。遠くからでも一目でわかつてしまう。できれば蜃気楼であつてくれと滝川は思った。

「あ、花子っ！」

成川がこちらに気付いた。紺色のポロシャツにビンテージ物の色褪せたジーンズ姿だった。私服になるとまだ学生っぽかった。

「や、やあ成川くん」

「お前つてヤツは……やあじゃねえよ」成川はイライラしたふうに頭をかきむしる。「でもやっぱこの辺にいたかー。お前、ここに入ってたからな」

「あははは」

——殴りてー。元カレに『お前』呼ばわりされるとどうしてこうも腹立つのかしらん。

「ていうか花子、チャリ盗まれてんぞ」

「盗まれ？」

「こいつだよこいつ」

成川はクノイチを指差していた。「このクソガキ、盗んだくせに何もしゃべらねえんだ。怪しいつたらないぜ」

——なるほど。そういうことね。成川はクノイチが赤い彗星号に乗っているところを見かけて止めさせたんだな。なんといういらぬ偶然。

「い、いや成川くん、この子は別に自転車を盗ったわけじゃないんだつて」

「どうだかな」

「本当だつて。この子はあたしが泊まつてる民宿にいる子なんだよなー、クノイチ」

コクツと無言で小さく頷くクノイチ。——おかしい、なんだこの

元気のなさは。大体いつものコイツなら成川に言われるがままなんて不自然だぞ。何がしかの反抗的態度、あるいは直接的な反撃やらで挑むほうが自然なんだけど。

「まあこんなガキはどうでもいい。花子、帰るぞ」

「……え？ 帰る？」 滝川は首をもげるぐらいひねる。「もしかしてあたしを連れて帰るためにここに？」

「当たり前だろ。ほかに何があるっていうんだよ。お母さんから聞いたぞ。花子がいなくなっちまったてな。会社からばつくれるは上司に電話で暴言吐くはそのまま行方くらますは、まったく、大人のすることじゃねえだろ」

——ぐはっ、んなことまで知られているとは……。そういえばオカンには成川ちゃんと別れたとは一言も言っただけだったな。やれやれ……こういうとき家族公認カップルの面倒臭さを痛感するなあ。

そのとき、沈黙していたクノイチが突然声を荒げる。

「クリステル姉は大人だっ！」

「く、クノイチ？」

滝川はびっくりして心臓がテンエイティーしてしまったかと思った。見ればクノイチ、涙目になって成川を睨んでいる。その表情は昨日ナンパに失敗したクノイチの顔を髭髯とさせる。まだ昨日のナンパ失敗を引きずっているのだろうか。

——違う。そんなんじゃない。何か、何か地雷があつたんだ。クノイチを爆発させるだけの地雷を、成川くんが踏んだんだ。

けれど、滝川にはその地雷の在り処はわからない。

「クリステル姉は大人だ！」

クノイチはもう一度叫ぶと、成川にとびかかった。突然のクノイチ暴走に、成川は目を見張るだけでクノイチの出鱈目に繰り出されるパンチやキックをまともに食らう——が。

いくらなんでも大人の成川にクノイチが敵うはずがない。ボコボコにされて怪我するんじゃない……と心配した滝川だったが、よく見れば既にクノイチはそこかしこを擦り剥き、痣を作っていた。

——どういうこと？ まさかあたしが来る前に成川くんによられたとか！？

「くっ、なんだよこのクソガキがつ！ 離れろ！」

成川もようやく事態を把握し、クノイチ撃退に移行する。クノイチは頭部を成川の手を押さえつけられながらも、がむしゃらに両腕を振り回している。

「テメエこそクリスタル姉から離れる！ おれの女に手出すんじゃないぜっ！」

「バカかこのガキは！」

……クノイチ。

もみ合う二人を見ながら、大人って本当に何だろ、と滝川は考える。

——大人って言っても色々いる。ナンパの上手いやツ、ナンパの下手なヤツ、ガキみたいな大人、大人みたいな大人。

成川くんは……大人？

……大人かもしれない。でも……あたしとは違う大人だ。

——そして。

滝川は二人のもみ合いに割って入り、成川の顔を殴打した。平手打ちではなく、グーで、殴打した。手の甲が軋む感覚と、成川の左頬が潰れる感触が同時に襲ってくる。——いってー、けどすつきり！。

成川は殴られた頬をおさえぶるぶると震え、ぼたぼたと鼻から血を流し始めている。終いには涙さえ浮かべる。クノイチはとうとうきょとんとした様子で未だに何が起こったのかよくわかっていない様子だ。

「な……なに……するんだよ」

成川は呻くように言う。

「失せる成川。あたしのマブに指一本触れるんじゃないぜ」

「くーっ！ おふくろにも叩かれたことなんてないのにー！」

成川は泣き喚きながら県営駐車場に逃亡、駐車してあった痛車に

乗って去っていった。やかましいエンジン音が波の音を一瞬かき消したが、すぐにまた穏やかな潮騒がその場を埋める。

逃げていく成川の後姿は、どう好意的に見ても大人には見えなかった。

十分遅れとるよ

滝川とクノイチはその足で古道具屋に向かった。道中、滝川は首を傾げた。クノイチの体の傷、それに赤い彗星号がところどころ凹んだり傷ついているのだ。車輪が回転するたびにガラガラと奇妙な音まで立てている。ここまでボロかったかな、と思う。

——成川め。クノイチをイジメやがったうえに赤い彗星号にまで……おのれ。正拳突きでもかましておけばよかったぜい。できないけど。ってありや、あたしはこんな凶暴な女子だったかしらん。

なにはともあれ古道具屋にゴールイン。古道具屋の名前は『近堂』だった。

古い商店街の中の一角に店を構えていて、様々な商品が所狭しと並んでいた。テレビからエアコン、冷蔵庫などの電化製品から巨大な招き猫やウクレレ、百科事典、たんす、卓袱台、カツラ、竹刀、兜、藁人形……ぱっと目に付いたものを挙げてみるがキリがないのでやめる。まあ、ゴミ屋敷と僅差、といった佇まいである。その混沌とした空間の中で、主らしきおばあさんは丸椅子に座り、ノートパソコンの画面を眺めてマウスをかちかちしていた。意外とデジタル通なおばあさんなのかもしれない。

滝川が「買い取りなんですけど」と言うと、おばあさんは顔をしE Dばりに明るくして「いらっさーいらっさー」と奇怪な挨拶を寄こしてきた。

「……これなんですけど」

滝川はおばあさんに腕時計を差し出す。おばあさんは老眼鏡をくいくいと指で持ち上げ位置を調整、腕時計を受け取り鑑定を開始、した直後、鑑定は終了した。

「千五百円だーね」

店主のおばあさんはあっさりと言った。

「ええ！？ おばあちゃんっ、そりゃいくらなんでも安すぎだよっ

！ ロレックスだよ！？」

「ロリックス？」

「そんな幼女好きみたいな名前じゃねえ！」

「本来は二千五百円で買い取るところなんじゃがねー」 本来的な買取値がそもそも安い。「これを見てみい」

「どれ？」

おばあさんはずいといと腕時計を滝川の眼球のまん前に近寄せる。ふーむ、きれいな時計である。どこにも欠点は見当たらないように見える。

「十分遅れとるよ」

「……」

十分遅れてるから千円引かれたらしい。——意味わからん。なんてこったい。

しかし、滝川はその値段で納得していた。実はそんなに価値があるものだとは思っていなかった。持っていてても虚しいだけの代物だ。大体、見る人や見る場所、見る大人が変われば、価値なんてころころ変わってしまうんだ。

うん、そう。

いくらでも、変わっちまうんだ。変わっていけるんだ。

さて、あたしはどんな大人になろうか。とりあえずクリステル級のすげー大人になってやる。

いつかクノイチに、大人になる方法を教えないとね。

滝川はおばあさんから千五百円を受け取る。

はんぺん

古道具屋からの帰り道も、クノイチはプール開きに雨に降られた小学生みたいに元気がなかった。ついさっき成川とやりあった地点を過ぎ、とぼとぼと『民宿熊島』へと続く海岸沿いの国道の歩道を進む。

潮風がぶあつと吹き、前方十三メートルほど先にいる女子大生風の女子二人のスカートがめくれる。内部構造がしっかりと視認できるほどに。

しかし、まことに信じられないことに、クノイチは全く動じなかった。

——重症だ……。

滝川は事態の重さに改めて気付く。そこまで成川にコテンパンにやられてしまったのだろうか。

——仕方ないな！。今日は特別、ご褒美だゾ。

「クノイチ」

「ん」

「おっぱい揉ませてあげよつか」

「えっ！ いいの!？」

——それでこそクノイチだぜ。

「おうおう。どーんとこいや」

滝川は胸を張る。通行人の痛い視線は心の壁でガードする。

「で、ではオトコバに甘えて」

知らない言葉を無理に使いたいお年頃だということで、今回はスルーしておく滝川。ちなみに言うまでも無いが『お言葉に甘えて』です。

クノイチの両手がすつと滝川の胸を鷲掴みにする。——む、躊躇が無いなコイツ。

そして天然バイブレーション的動作に移行、滝川の左右の乳がふ

にふにとされる。——うおー久々に乳揉まれたーよー。

「どーよ、あたしのパイオツは」

クノイチに訊くと、手をぱつと離し、悩みだしてしまう。そんな
に難しいことを訊いただろうか。

「例えて言うなら」

「例えて言うなら？」

「はんぺん」

クノイチの頭部に手刀を叩き込んだのは言うまでもない。

202号室の掃除

201号室——滝川の部屋の掃除が終わり、続いてお隣の202号室を掃除しようと、新はドアをノックする。しかし無反応。でもまあ、これはいつものこと。ドアを開けてみると、案の定誰もいない。久野一太——クノイチは外に遊びに行ったのだ。

部屋の中を見渡す新。とにかく散らかっている。ゲームソフトはプレイ済み未プレイ問わず床に山積みになれ、ゲーム機は据え置き型が三台（もちろんそれぞれ違う機種）、携帯ゲーム機が二台（これはなぜか同じ）。それと漫画の数も半端ではない。いつの間にか買ったのか部屋の隅に三段のカラーボックスが置いてあり、全ての段に隙間なく漫画が詰まっている。

——なんかどんどん増えてるような気もするなあ。

新はぼんやりとそう思う。新はゲームや漫画にはあまり興味はない。ここに来る前——小学校四年まではかなり入れ込んでいたが。

ひとまず窓を開け放ち空気の入れ替えをする。外を窺うと、まず紀伊介と滝川がウッドデッキのテーブル席で話しているのが見える。二人とも煙草の煙をもくもくと立ち上らせ、周囲を煙たくしている。浜辺のほうに視線を移すと、天羽あまはな今日子けいこが浜辺を歩いているのが見える。真っ白いワンピースに麦藁帽子をかぶっているその姿は、浜辺の美少女のあるべき姿を具現化したものと言っても差し支えない。案の定、まるで餌に釣られた魚のように、一人の男が近寄って声をかける。無視されている。どこかのナンパ少年のように肩を落としている。

——ていうか今日子……何をしてるんだろ。

今日子は民宿熊島のほうを見ては視線を逸らしうろろし、また民宿を見やっては視線を外す、なんてことを繰り返している。なんだか挙動不審だ。

——どうしよう……会いに行きたい……けど、いったいどんな顔

して会えばいいんだろう……。僕だって……。東京に……。やめよう、今は掃除だ。この民宿が僕にとっては全てなんだ。

新は今日子にロックオンしていた視線を引き剥がし、別の方向へと向ける。

拳動不審といえば、そこから少し離れたところにいるアフロ頭の少年二人も不審だ。彼らは海で波に乗っているサーファーに目を向けていた。双眼鏡越しに。サーファーに憧れているのだろうか。それにしてはなんだか監視の目を向けているように見えなくもない。

——あのアフロ頭の子たちはクノイチの同級生じゃなかったっけ。氷で薄まったコーラみたいな記憶を抽出してみるが、はつきりした回答は導き出せなかった。

「さて、と」

窓から見える景色から、ゲーム漫画天国へと視線を移す。「掃除、するかな」

だが、フラれてばかりだった

*

最近、学校でコイバナというのが流行ってる。恋のお話、らしい。
——恋バナ？　って書くのかなあ。

とにかくそのコイバナとやらは男子と女子の枠を超えてクラス内でひそひそと囁かれているのだ。

。。くんは**ちゃんのことが好き。××くんは　　さんのことが好き。¥¥くんは\$\$くんのことが好き（一応可能性はあるやもしれぬので入れてみた）——というのとはまたちよつと違う。なんというか、もつと深いのだ。エツチなのだ。

クノイチにとって学校は第二の遊び場みたいなものだ。勉強は面倒だが遊びは良い。仲の良い友達もいる。嫌なやつもいるけど。例えばアフロ兄弟の鉄平と銅平^{てつぺい　どうぺい}とか。例えばというか、その二人しかないけど。

アフロ兄弟こと鉄平と銅平は、双子の兄弟だ。そのあだ名が指すとおり、アフロ兄弟の頭はアフロ頭、のように見える。実は癬毛だ。でもぐりんぐりんにかールしていて、しかも質感が若干チリチリしているところが実にアフロ的で、初対面だろうと癬毛という真実を知っている彼らの母親でさえも『アフロだーねー』という感想しか抱かない。

そのアフロ兄弟がナンパに成功したのは、もうかれこれ二ヶ月前のことだ。女子中学生のナンパに成功したのだ。

アフロ兄弟はかなり大人っぽく見える。背も高い。中学一年生となら渡り合えるぐらいに大人だ。彼らのナンパの成功は男子の中では話題どころか伝説にさえなりつつあった。そしていつのまにか『ナンパの成功』大人への階段』というわけのわからぬ図式までが当たり前になってしまった。ここ最近のコイバナのエツチ化の原因は

ここにあると見てまず間違いない。

クノイチは背が低い。子供っぽい。アフロ兄弟にことあるごとにバカにされていたが、ここにきてナンパ成功を収め増長している彼らに、ガキだガキだとさらにバカにされているクノイチだった。クノイチは自分も大人になるべくナンパに挑戦することを決意、付近の女子に声をかけるようになった。

だが、フラれてばかりだった。

小学五年、独身

この日も、クノイチはフラれてばかりだった。

ゴールデンウィークが明けて二日目、平日の砂浜に人はほとんどいなかった。犬を散歩しているおばさんがいるけど、年の差推定四十歳を克服するだけの愛と勇気と諦めなんか持ち合わせちゃいない。ゴールデンウィーク中は海を見物しに来る旅行者でそれなりに賑わっていたけど、そのときのクノイチの戦績もやはり全く振るわなかった。

——うむむむ、何が間違ってたんだ？　つーか間違いとか正しいとかあるもんなの？

クノイチの心の問いに答える人間はいない。一瞬、プライドをかなぐり捨ててアフロ兄弟にどうやってナンパに成功したのか教えてもらおうかと思ったけど、そんなことするぐらいなら新にーちゃんの掃除の手伝いでもしたほうがマシだ、とクノイチは思ってその考えを打ち消した。

——あーあ……おお？

意気消沈の体で浜辺をプラプラしていると、浜辺に寝そべっている女がいた。女の横には赤い自転車が倒れている。大人だろうか。それにしても子供っぽい顔だなあ、とクノイチは思った。——それに大人が浜辺に大の字になって、それもピシッとしたお葬式みたいな格好して砂の上に寝てるなんてありえねー。でも、ちゃーんす。

今度こそと気合をいれ、クノイチは突撃する。

——おれはイケメン、おれはイケメン。

自分に強い暗示をかけるクノイチ。——大丈夫、もうどうやって声をかけるか決めている。今まではちょっと紳士っぽかったな。今度は爽やかにいくぜい。

「ヘイ、ネーチャン。添い寝してあげよーかい？」

「少年、ナンパの仕方になっていないぜ」

「えっ——」

——考えた決め台詞の中でもとびきりイカしてるのを選んだのに！？

まさかの展開に（あくまでも本人的に）焦るクノイチは、誰にも要求されていないのに軌道修正を試みる。ええとええとええと……こ、これでどーだ！

「ヘイ、ネーチャン。おっぱい揉ませろや」

頭をぶっ叩かれた。あだだだ。

——ヤケクソだったんだよ。本当だよ。

また呆気なくフラれた。いったい何十連敗したのかわからない。そんなその他大勢の失敗に埋もれるのが常なのだが、今回の失敗はなぜかクノイチの中で失敗フォルダに入れることを強行に拒んでいる。

——な、なんだろ。このネーチャン、なんか……いいなあ。

「ネーチャン、名前なんつうの？」

クノイチは訊いた。でも大の字で寝ている女は寝ているのか何も反応が無い。ただの屍じゃないのかと思うほどに。——ああ、そっか。まずおれから名乗らないと失礼なんだな。よし。

「おれは久野一太っていうんだ」

クノイチは自分の名前を言った。けれど女は瞳を閉じて誰かを想っているのか知らないがとにかく黙ったままである。——うむむむ、もう少し詳しいプロフィールが必要なかもしれないぞ。

「あだ名はクノイチ」

あだ名を言ってみた。しかし女は目を瞑ったままだ。——もしかしておれが独り者じゃないと疑ってるのかな？

「小学五年、独身」

さらに詳しくプロフィールを語るも、女は何の反応も示さなかった。もしかこの女の人は眠り姫でおれのキスを待っているのかもしれない、と前向きに考えてみるクノイチ。でもそれじゃ変態さんだなあ、と即座に気付けた彼は、まだ救いようがあるといえよう。――

「っかこのネーチャン、ちょっと失礼だなー。」

「礼儀知らずだよネーチャン。名乗られたら自分も名乗らないといけないんだよ」

女が僅かに動いた。頬をひくひくと動かし、何かを喋ろうとしているようだ。

「ヘイ、ネーチャン」

クノイチが再度声をかけると、女が小さな声で言った。「あたしは滝川――」

「……すてる」

「お？」

――何を捨てるって？

「クリステル……滝川クリステルなのだ」

「おお、外人？ ハーフ？」

「琉球人とアイヌ人のハーフだよ」

ハーフつつかそれって百パー外人だぞ！ と、にわかに興奮するクノイチだった。

「よくわかんないけどスゲー。スゲーよクリスタル姉ちゃん」

「クリスタル違うつつうの。あたしのことはクリステルと呼びな」

その後、

「どこから来たの？」

「トウオウキョウツ」

「うおー外国の都市っばーい。発音が」

「うつせー。少年、お前はどこ住んでんの？ 地元の子？」

「民宿っ子」

「ナニソレ？」

「民宿にお泊りんこ」

「ほほー民宿にお泊りんこ。なるほどなるほどー。連れてけ」

そんなやり取りが交わされ、クノイチは滝川を『民宿熊島』に連れて行くことになった。滝川は『民宿熊島』に入るなり「ここにし

ばらく泊まるわー。丁重に扱えよー」と新に言っていた。

よくわからないけど、とにかく、ついに女の人自分が自分についてきてくれた。そう思うと、クノイチは興奮せずにはいられなかった。

それ以来、クノイチは滝川のところへちよくちよく遊びに行っている。クノイチが勧めるゲームと漫画を滝川は物凄く楽しそうに手に取り、まるで同じ小学生の友達と遊んでいるようだった。そんなわけだから、これは果たしてナンパの成功といえるのだろうか、とクノイチは首を傾げていた。

成功かどうかかわからないので、アフロ兄弟にはまだ自慢していない。

目の下に隈と皺ができちまうぜい？

六月二十五日、土曜日、午前六時半。クノイチ起床。——今日は学校はお休み。いいい。

休みの日、子供はなぜか早起きし、大人は昼まで惰眠を貪る。クノイチは子供の例に漏れることなく早起きで元氣いっぱい。パジャマから普段着へ十七秒で着替えて滝川の部屋に行ってみるが、やはり彼女も大人の例に漏れることなく爆睡している。

仕方なく、クノイチは一人で遊びに行くことにする。まあ、いつものこと。

クノイチは他の客と違って一階のダイニングでご飯を食べるので階段を降りて一階に行く。リビングを突っ切ってダイニングに行くこととするクノイチの目に、巨大なおっぱいが映りこむ。男の条件反射的に急停止。春日井弥生がソファの横にある本棚の本を物色中だ。春日井は滝川が泊まり始めてから二週間ほど経ったところに、この民宿に来たおっぱいな人である。クノイチは密かに、春日井のおっぱいの体積は滝川の一億倍だと試算している。

「ヘイ春日井ちゃん」

「あら一太くん、おはよう」

「何してんの？」

「本を選んでるのよ。これだけあると迷うわねえ」

「字ばっか読んできると、目の下に隈と皺ができちまうぜい？」

クノイチがそう言うと、春日井がギロリと睨んでくる。それは普段の春日井からは想像できんほどの鋭い視線だ。クノイチはびっくりする。でも春日井はすぐに手をぶんぶん振ってちよっと引きつった笑みを浮かべる。

「あ、やーだあたしつたらオホオホ。だめよ一太くん、女性にそんなことを言っちゃ。いい？ 皺のある女性なんて、この世にはいないのよ？」

「えー、でもこないだクリスタル姉は言ってたよ。『あたしも十年後にはシワシワのババアかなー』って」

「……………」春日井はまるで石化したように沈黙する。「…………それは違うのよ、一太くん。滝川さんは未来のことを予想しているにすぎないの。実際は十年後になっても、滝川さんはシワシワになったりしないわ」

「おお、もしや春日井ちゃん、未来人？」

「未来人？」

「だって未来のことわかんたもん。スゲー」

「そ、そうよお。大人は何でもわかるのよ、オホホホホ」

「スゲー」

そうかー大人はなんでもわかっちゃうのか。そっかそっかー、ナンプを成功させちゃうわけだ。と納得するクノイチである。

「ていうかさあ、そんなの読んで楽しいの？」

クノイチは春日井が手に取っている文庫本を見やる。背表紙は日焼けしてページは泥水で煮込んだように茶色い。——つかタイトルすらちゃんと読めねー。

「ええ、楽しいわよ」

「ふーん、おれにはわかんねーや」

「それは勿体無いわ。せっかくこれだけの書物があるのに」

リビングにはソファとガラステーブル、それに大きなテレビとテレビ台がある。いささか年季が入っていることに目を瞑れば、それなりに見えなくもない部屋である。けれどソファの横にある本棚の存在がやけに浮いている。並ぶ本のラインナップは国内外の古典文学ばかりで、クノイチ的には病院の待合室にあるしけた本棚よりひどいと思っっている。

「古いつちいよね、ここの本」

「ああ、ここのご主人が若い頃買ったものみたいよ。ご主人ね、若い頃は小説家を目指してたんですって」

「ショーセツ力って小説を書く人？」

「そうよ」

「はーん」

おっぱいは大きいけどあまり話は面白くない春日井と少し話をしたクノイチは、ダイニングに行き用意されていた朝ごはんを一分十七秒でかき込んで、すぐに外へ遊びに行く。

ウッドデッキのテーブル席で煙草を吸っている紀伊介、それに浜辺のゴミを拾っている新が目に入る。

紀伊介に「よージジイ。まだ生きてるみたいだなー」とブラツクな挨拶をかまし、ゴミを拾っている新に見つからないようにそろりそろりと民宿の裏に回って国道に出た。

新に見つかると手伝えだなんだとうるさいのだ。——まったく、こっちはお客さんなんだぞ。

どっ、行くんだろ

国道に出ると、クノイチは早速ナンパを開始する。上手い具合に犬の散歩中の中学二、三年ぐらいの女子を発見、背後から距離を詰め、思い切って声をかける。

「ヘイ、オネーチャン。犬の散歩ついでにおれも散歩してみようぜ！」

その女子はちらりとクノイチを一瞥したが、無視して行ってしまう。散歩されていた犬にまで哀れみのこもった目で見られている感じがする。

その後も道行く女子にナンパをしかける。主に女子中学生、若い大人の女の人がクノイチのターゲットである。自分でもよくわからないのだけど、クノイチは同年代の小学生女子には全く興味が無い。

——なんでだろ。でもあいつらバカだからな！。

自分のことは完全に棚にあげっぱなしのクノイチである。

結局、誰も引っかからなかった。もはや何敗したのかもわからない。なんだかもう負けることに慣れつつある自分がしょぼく感じる。クノイチはナンパを一旦やめて、ガードレールの上にひょいと乗っかって休む。車道を凶暴な鉄の塊がびゅんびゅん法廷速度三十キロオーバーで突進している。この国道は上空から見ると、まるでサードキットみたいにきれいな楕円形になっていて、どういうわけか警察権力の監視の目が薄く、走り屋たちの穴場的スポットになっているのだ。

——あーあ、おれもかつこいい車でも買えばナンパに成功すのかなあ。

そんなことを考えていると、ふと家族連れが目に残る。小学一年生ぐらいの男の子を、母親と父親が左右から挟むように並んで手を繋いで歩いている。何を話しているのかは車のエンジン音やらでよく聞こえないけど、にこにここと笑っているのはたしかだ。

——どこ、行くんだろ。

クノイチは自分の両親に思いを馳せる。

『太あ、ご飯の時間だよー』

『ほいほーい』

母と息子のやり取りのようだけど、実は違う。「母の母」と「娘の息子」つまり祖母と孫のやり取りだ。

クノイチの両親は仕事で忙しく、海外を飛び回ることもしょっちゅうで、ほぼ全くと言っていいほど家に帰れなかった。そこで母方の祖母の家にクノイチは預けられた。祖父はクノイチが生まれる前に他界していたから、祖母と孫の二人きりだった。

その祖母が死んだのは二年前。クノイチが小学校三年の時だ。

告別式やら何やらが終わり、祖母の家に落ち着いたとき、クノイチは母親に言われた。

東京に戻ってきなさい、と。

クノイチには、邪魔だから祖母の家に預けて今度は戻って来いかな、としか思えなかった。納得がいかなかった。それに転校だつてしたくない。——友達だっているんだぞ。

嫌だ嫌だというクノイチに負けて、母は祖母の家からほど近い『民宿熊島』にクノイチをずっと宿泊させることにした。

このときが、クノイチが最初に大人になりたいと思ったときだった。大人になれば、なんでもできるのに。母さんや父さんがいなくても、ちゃんと自分の力で生きていけるのに、と。

だから、ナンパに成功して大人のように見えるアフロ兄弟が、羨ましい。

大人って、重いなあ

——おつとつと、思わず心の黒アルバムを広げちゃったぜ。

クノイチは頭を振って、ガードレールから飛び降りる。太陽はかんかに照りつけ、むしむしした暑さが地面からむあつと湧き出ている。——六月でもうこんなにあちいんだから、夏休みになったら百度はいっちまうね。なーんて思ってるところで、ちゃーんす。

クノイチはこちらに向かつて歩いてくる二人の女子をロックオンする。二人同時にロックオンなんて、おれってスゲー、と自画自賛するクノイチ。

接近してくるにつれ、二人の女子が中学生ぐらいとわかってくる。頭の中でキメ台詞を乏しい語彙力の限りを尽くして構築する。——ぎひひ、カンペキすぎるぜ。今だーっ。

「ヘイヘイ、オネーちゃんたち、おれが泊まってるホテルに遊びに来ないかい？　ゴージャスで有名人御用達、キングサイズのベッドもあるぜい」

——泊まるここはどこだってホテルだよきつと。ベッドだっておれの体の大きさはじゃキングサイズなのだ。有名人は……おっぱい大きいし春日井ちゃんならきつと何かで有名だと思っよ。

「はあ？」「なーにこの子ーっ。ぎやははははっ！」

酷いリアクションを頂戴してしまった。一人は呆れ、もう一人はクノイチの言葉で笑いその姿を見てまた笑う。呆れてるほうの女子が「阿呆」とこの暑さも吹き飛ぶほどの冷ややかさでもって言い放ち、二人はクノイチを通りすぎていく。

——あ、あはははー。まあいつものこといつものこといつものこと。いーつーもーのーこーとう……俺って、阿呆？　大人じゃなくて、阿呆？

クノイチは何かポキリと折れたような音を聞く。それは頭の中で残響となってクノイチの骨に響くように広がっていく。——どう

して……駄目なんだろ。

「おはー、クノイチ」

後ろから声をかけられ振り向くと、滝川がいる。手を団扇代わりにばたばたしている。

「おはははは……」

——おははははー。もういーやーだよー。

「どうしたんクノイチ、ナンパしくったぐらいで気落とすなって。何度もナンパしていくうちにきつと成功するよ」

——みーらーれーてーとうわー。

頭をぽんぽんと優しく叩かれる。少し、気分が落ち着いてくる。

——そうだよな、きつとそのうち成功する……かな。

「うん……そうだな。うん、そうだそうだ」

「そうだそうだそうなのだ」

——だよな。おれまだ十一歳だし、これからまたたくさんのおネーちゃんたちに声かけりゃいいさつ。

「うん、俺もよくわかんないけどそう思うのだ」

——うっし、じゃあ場所変えてみよつ。商店街のほうにでも行ってみつか。いやあそこはおばちゃんが多いなあ。駅のほうならもしかしたら！ やべーちよつと楽しくなってきた！ おれが大人になる日も近いぞつ。

「大人はスゲーよなー。ナンパなんか簡単に成功させちゃうんだもん」

クノイチが何気なくそう言うと、滝川はそれをあつさりと否定する。

「んー、それは違うぞクノイチ。大人だからってナンパが上手いとは限らないよ」

「えっ——」

「大人の中にだってナンパの上手いヤツもいれば下手なヤツだっているよ。ナンパすらしたことないヤツだっているよん」

——なんだそれ。じゃあ大人になるにはどうしたらいいんだ？

鉄平と銅平は大人じゃないってこと？ でもナンパして成功すれば大人なんじゃないの？ あれれ？ …… もう、わけわかんね。

「……じゃあ、大人って何？」

「クノイチ？」

「大人って何なの？ ねえクリスタル姉、教えてよっ！」

——知りたい。大人になる方法を。

クノイチはまるで滝川の中にその方法があるかの如く、滝川を見つめる。視界がブルーの中みたいにぶるぶるしてくる。

水面の向こう側の滝川は、よくわからないけど黙考したまま石化状態である。春日井といい滝川といい、大人はよく石になるよな、とクノイチは思ったり。でも滝川の石化状態はなかなか元に戻らない。目の焦点が合っていないさそうな眼球が、思い出したようにぱちりと瞬きをする程度だ。

「クリスタル姉、大人ってどうすりやなれるの！」

クノイチが叫ぶと、滝川の石化状態が解ける。

「……わかんないっちゃ」

滝川は苦笑いしながら言う。

「えっ！？ だってクリスタル姉、大人なんだろ！？」

「たぶん」

「えーなんだよそれー、意味わかんねー」

「あたしだって意味わかんねーよ」

「なんだそりゃ」

「まあ、わかったら教えてやるぜい」

——なんだそれ？ どうやって大人になるかわからないのにどうして大人になっちゃってんだよー。ていうかそもそもクリスタル姉は大人なのかなあ……。

色々な考えが去来するけど、ひとまず大人になる方法を教えてもらえる約束をしたんだから、よしとしようー、とクノイチは納得、することにする。——本当はあんまりナットクしてないけどな！

「……約束だぞ」

「女に二言はない」

——それって男じゃなかったっけ？

「はあ……」

「いっちょまえに溜息なんかついて、一億年早いぞ少年」

「クリスタル姉のせいだ」

「あたしのことはクリステルと呼びな」

「クリステル姉のせいだ」

——クリスタルのほうがいいと思うけどなあ。

「もう、しゃあないな」

滝川は「やれやれ」と言いながら、ズボンのお尻のポケットから茶色い革の本を取り出す。——何の本だろ。

「クノイチ、お前にこれを授けよう」

滝川がそれをクノイチに差し出す。わけもわからずそれを受け取ると、思いのほか重いことに、クノイチはびっくりする。

「お？……こ、これは！？」

「ふふふ、驚いたか」

「これ、何？」

「……」

滝川が言うには、それは手帳というもので、大人はみんな使っているという。かなり高いんだぞ、とあとから付け加えていた。——そういえばクラス的女子が手帳使って予定とか日記を書いてたなあ。でもこれは女子が使ってたのとは全然違う。

クノイチは手帳の重さからそう判断する。女子が使っているのはキャラクターの絵だとかピンクや黄色のテカテカした感じだけど、滝川がくれたものは馬を撫でているようなさわり心地で、まるで手帳そのものが生きているみたいだ。

クノイチは思った。——大人って、重いなあ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4691z/>

フライ・フィッシャーズ

2011年12月31日21時48分発行